

シリア紀行 回顧録(1993年3月)

斉藤 孝

パルミラの栄光

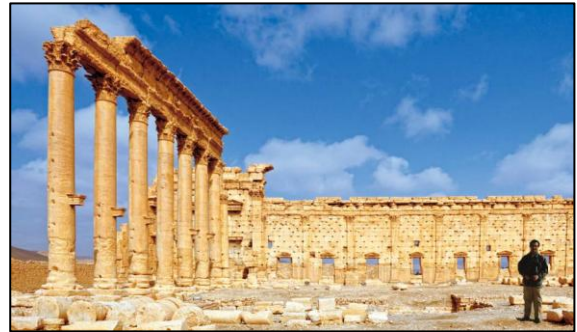
この紀行文は27年前の回顧録である。私は1993年3月に約一ヶ月に渡りシリアを訪れた。当時のシ



リアは今の内戦で破壊を繰り返す国とは全く違い、平和な輝かしい立派な国だった。

そこに生活するシリア人はみな心優しい人々だった。確かに独裁者ともいえるアサド大統領(父親)によって国内は強権的に支配されていたが、イスラム教を民族の熱狂的のスローガンとして掲げることもなく、比較的宗教の自由もあり女性の地位も保証された驚くべき先進的なアラブ人の国だった。街歩く女性も田舎の女性であってもスカーフで髪を隠すこともなく、

顔にヴェールなど一切用いていなかった。魅惑的な青い瞳の美人も多く澆漓とした彼女たちの姿が印象的だった。そのシリアが現在のようにテロ、難民、イスラム国、虐殺など繰り返し、その素晴らしい国が崩壊したようである。もはや言葉にならないほどに悲劇の国に変わってしまった。シリアやレバノンを愛する私は実に悲しい。どうしてこのような惨めなシリアになったのか。もしかしてアメリカやロシアなどが原因で



はなかろうか。強権的なアサド(子供)政権もその犠牲者ではないのか。反アサドを誹謗する民主勢力やイスラム国などだけがシリア内戦と混乱を招いたわけではない。西欧諸国はあいつも変わらず19世紀末にアラブ世界を帝国主義的に分割したと同じやり方でシリア内戦に干渉している。もしかして千年前の十字軍時代と全く同じやり方で西欧諸国はシリアという歴史の宝庫を破壊している。シリアでは古代から様々な民族が様々な宗教を生み育て仲良く共存してきた。やがてユダヤ教やキリスト教へと発展しイスラム教につながっていく。その間に宗教のモザイクのよう

に様々な宗派も生まれた。たしかに宗教闘争を繰り返したがお互いに絶滅させるような事はなかった。

パルミラの栄光や偉大なマリ文書を誇りにしてほしい。

先進的アラブ共和国

20年前のシリアは、素晴らしい先進的アラブ共和国だった。宗教色を極力排除した中東ではトルコ共和国に似た政教分離した西欧的国家を目指していた。それはイスラムの戒律を国政にまで反映する前時代的な封建国家、サウジアラビアと比べると対照的であった。ただし専制的なアサド大統領一族が支配する独裁王朝であったことは事実である。しかしアサドは北朝鮮の無法な暴君とは全く違った独裁者だった。彼はイスラム世界から少数派異端とされるアラウィー教徒であったから、それだけに宗教よりも世俗的シリア国家を描いていた。複雑に細かなモザイクのよ



(写真)ラタキアの親子 子供は金髪

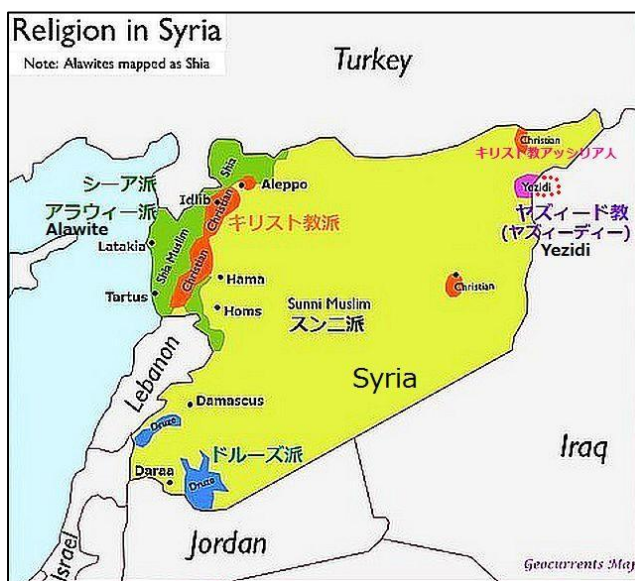
うに宗教が生まれシリアでは宗教間での争いは昔から当たり前であった。アサドは敵対するイスラエルと強烈に争ったとしても、もともと

シリアには多数のユダヤ人が住んでいたからユダヤ教にも寛大だった。ユダヤ人とイスラエルを無理やり作り出したシオニストのユダヤ人とは区別していた。シリアは歴史的にユダヤ人が活躍した土地である。かの有名なユダヤ人ラビ、マイモニデスは13世紀にダマスカスに住みイスラム王朝サラディンに仕えた。(写真) アレッポのホテル アサド大統領肖像

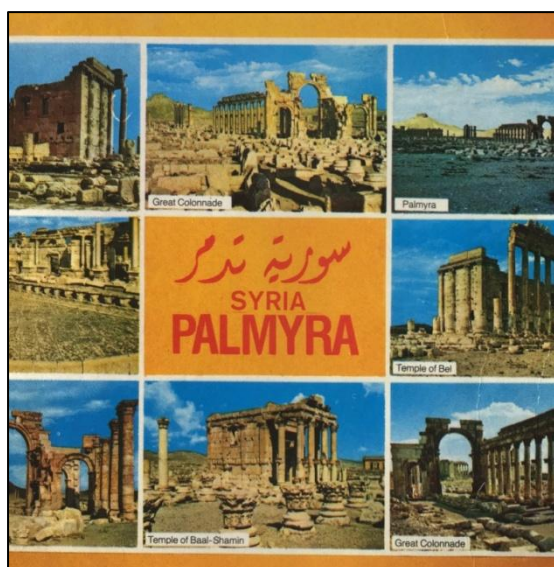


アラウィー教

その理由は、私の解釈ではアサドの出身母体であった「アラウィー教」にある。アラウィー教はイスラム教とは異なるもので、最近になりイランが自分と同じ「シーア派」の仲間であるかのようにいうが、アラウィー教はイスラム教の一派である「シーア派」に属するものではない。キリスト教やユダヤ教などと同じく独立した宗教といえるだろう。したがってイスラム教の特に「スンニ派」からは異端視されている。アラウィー教徒はクルアーン(コーラン)を用いずに独自の聖典をもち、礼拝(サラート)の向きはメッカ(マッカ)の方向ではなく、人間が輪廻転生することを信じている。サウム(断食)・ザカート(喜捨)・ハッジ(巡礼)を行わず、特にハッジを偶像礼拝として否定している。モスクを使わず、礼拝は宗教指導者の家に集まって行われることが多い。飲酒も認められ



ている。シリア北西部のラタキアには独自の神殿を構えている。このようにアラウィー教はイスラム教と



全く異なった独立した神秘主義的宗教といえるだろう。アラウィー教は、イスラム教やキリスト教、そしてユダヤ教など古代オリエントで誕生した様々な宗教から影響を受けた。シリア人の多くはスンニ派イスラム教徒であるから、アラウィー教徒は少数派なのであるが、アサド一族のように革新的な知識人を多く輩出している。

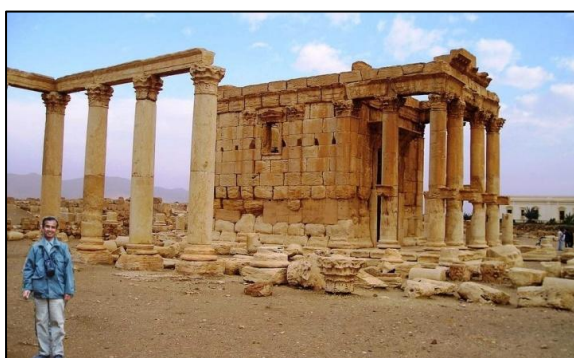
宗教のモザイク

シリアにおける宗教はモザイクのように複雑である。古くからのキリスト教、それもマロン派、シリア正教、アルメニア正教、アッシリア派などのキリスト教徒も多数住んでいる。

またスンニ派以外にシーア派などのイスラム教徒が大多数を占める。それから興味あることに東部イラク国境沿いにヤズィード教徒も住んでいる。ヤズィード教は古代イランで生まれたゾロアスター教に起源があるという。彼らの多くはクルド人である。さらにアラウィー教とよく似たドルーズ教というものが存在し、それを信じる人々の村がレバノン山脈に点在している。その中で私が最も興味を抱いてきたのはアラウィー教なのである。雪を頂くレバノン山脈、古代フィニキア人の故郷には大きなレバノン杉が茂っている。その山麓に続くシリア北部の山々の中にアラウィー教徒は住んでいる。イスマール派・マズダク教・マニ教・キリスト教及びシリア地方の土着宗教の要素が合わさったと考えられる。生前に善行を積みば死後ほかの人間に、悪行を重ねれば動物に生まれ変わるという転生思想も特色といえる。

シリアで訪れた遺跡

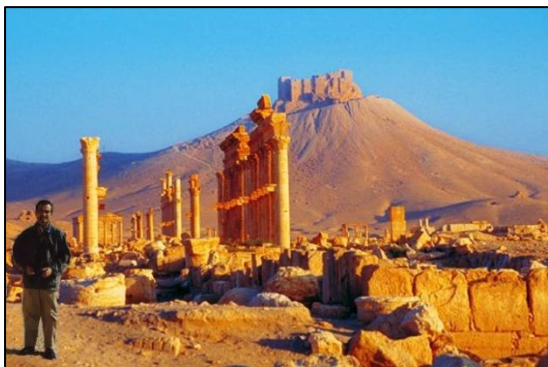
1993年にまずシリア北部のアレッポに降り立った。モスクワからアエロフロートに乗ったフライトだ



った。そこから西の地中海沿いのラタキア、ウガリット、タルトスそして東に進みイラク国境のユーフラテス川沿いのマリ遺跡、アレキサンダー大王の古都、ユーロポリス遺跡に行った。それからシリア中部にあるパルミラ遺跡を訪れた。そして大水車で有名な都市ハマーを通り、首都ダマスカスに行った。その途中、レバノン山脈の麓にあるアラム語を喋る村 Maaloula を訪れた。また欲張

って、十字軍時代のリチャード獅子心王 (Richard the Lion heart) とクルド人の英雄サラディンが戦った古城「クラック・デ・シュバリエ」を訪れた。(写真)パルミラのベル神殿

世界遺産パルミラ遺跡



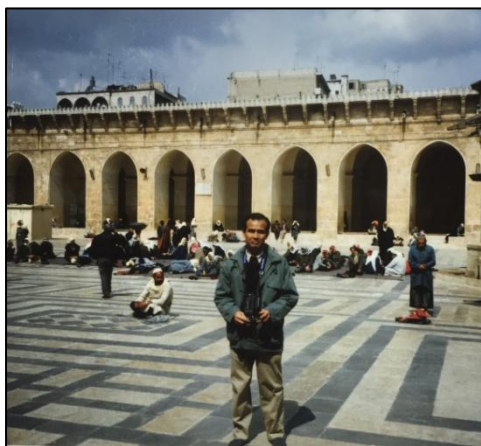
パルミラは、シリアにある世界遺産で、ローマ帝国支配時の都市遺跡である。パルミラの名前はギリシャ語でナツメヤシを意味する「パルマ」に由来するという。パルミラはメソポタミアと地中海を結ぶ隊商都市として繁栄した紀元前 1 世紀にローマ帝国の属州となり、中国とヨーロッパを結ぶ東西交易路の中継地として発展した。267 年になりクレオパトラの末裔を自称するゼノビア女王は、ローマ帝国から

の独立を試みたが強大なローマ軍の前に降伏した。

パルミラの街は、城壁で囲まれた部分が約 10k 平方ある。最大の建造物は、南東奥に建つベル神殿である。ベルとは「主」を意味し、古代シリアでは土地に肥沃をもたらす最高神とされる。32 年に建てられたベル神殿は、ギリシャ風の建物で、400 本近いコリント式円柱に囲まれている。

マリ文書

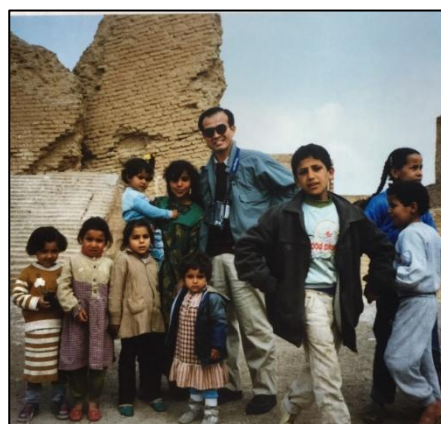
マリは、ユーフラテス川中流の右岸（西岸）にあった古代シュメール（シュメル）およびアムル人の都市国家である。現在のシリ



(写真) ウマイヤ・モスク

アのデリゾールの南東 120km に位置する。都市として繁栄したのは紀元前 2900 年頃から紀元前 1759 年にかけてのことで、その後ハンムラビによって破壊された。

楔形文字でアッカド語の書かれた 25,000 枚におよぶ膨大な粘土板は「マリ文書」(Mari Tablets) と呼ばれ、マリ王国の習慣や当時の人々の名前など、多くの情報を現在につたえている。



ユーフラテス川

ユーフラテス川は西アジア最長の、そして歴史上最も重要な川である。ティグリス川と共にメソポタミア（川の間土地という意味）を形作っている。源流は東トルコにあり、シリアとイラクを通過した後ティグリス川と合流し、シャットウルアラブ川としてペルシア湾に注ぐ。(写真)マリ デリゾールの子供たち

私はユーフラテス川の南岸、イラク国境に近いデリゾールを訪れた。デリゾールはダマスカスからパルミラを通りハサカに至る南北の街道と、東西に流れるユーフラテス川が交差する位置にある。その近くにはアレキサンダー大王が築いたユーロポリスの遺跡があった。

ダマスカス



ダマスカスはエジプトとメソポタミアを繋ぐ通商路の途中にあって繁栄した都市である。12世紀中葉になるとダマスカスは十字軍国家との間の戦争が激しくなるとダマスカスの防衛とエルサレムの奪還をイスラム教徒に呼びかける使者は必ずウマイヤ・モスクに立ち寄った。

ウマイヤ・モスク

ダマスカスの旧市街にあるのが世界で最も古いイスラム教のモスクであるウマイヤ・モスクである。ウマイヤ・モスクには洗礼者ヨハネの首があると信じられている。イスラム教徒の間には、世界の終末の日における救世主イエス

の再臨がウマイヤ・モスクにおいて実現するという信仰がある。(写真)ラタキアの少年

ラタキア

オスマン帝国時代にラタキア周辺はアラウィー教徒が多く住んでいた。もちろんイスラム教スンニ派の住民やキリスト教徒の住民も多く住んでいた。農村部では地主がスンニ派で農民がアラウィー派という状態であった。私にとり興味深いことはドゥルーズ教徒も共存していたということである。

ドゥルーズ教

ドゥルーズ教はイスラム教とは異なる独立した宗教といえる。アラウィー教と同じくシリアで生まれた神秘主義的な宗教である。イスラム教スンニ派から異端とされ嫌われてきた。

現在のドゥルーズ教徒は、レバノンを中心に、シリア・イスラエル・ヨルダンなどで暮らしている。特にレバノン山脈で暮らすドゥルーズ教徒はキリスト教マロン派と激しく対立し、内戦まで起こしてきた。(写真)アレッポのホテル ドアボーイ



イスラエルに暮らすドゥルーズ教徒はイスラム教徒やキリスト教徒のアラブ人とは異なりイスラエル国防軍に兵役義務がある。彼らはイスラエル国民としてユダヤ人と仲良く暮らしている。

アレッポ



首都ダマスカスに次ぐシリア第2の都市である。内戦前は人口約300万人でシリアの商工業の中心だった。紀元前から地中海とメソポタミア地方を結ぶ交易中継地として栄えた。内戦勃発後、アレッポは反体制派の最重要拠点となり、アサド政権と激戦が続いている。特にロシアがアサド側を支援した結果、多くの市民は毒ガスなどで虐殺されている。

私はアレッポの有名なスークで道に迷った経験がある。このスークは中東随一大きな市場である。

(写真)ハマーの大水車

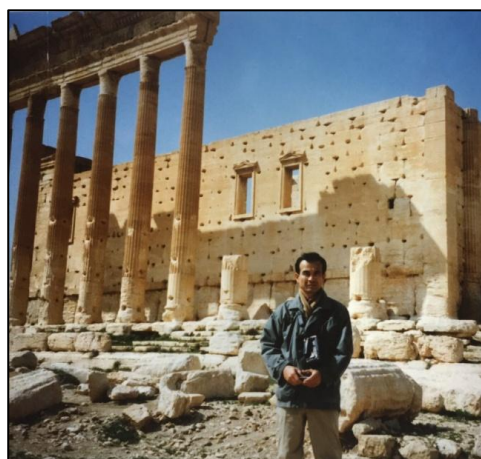
ハマー

オロンテス川沿いに広がる古い街には大型水車があり、庭園に水を供給するために使われている。こうした水車の歴史は紀元前にさかのぼる。

アラム文字

アラム文字は、ユーフラテス川上流からシリア地域にかけて定住し、地域の交易を担ってきたアラム人によって、フェニキア文字を基に生み出された。アラム文字からは現ヘブライ文字が生み出されている。

ペルシア帝国時代に行政言語としてエジプトからアフガニスタン・中央アジア、インドまで広範囲に渡って普及し、パルティア語やソグド語などの表記にもアラム文字が用いられた。(写真)パルミラの遺跡

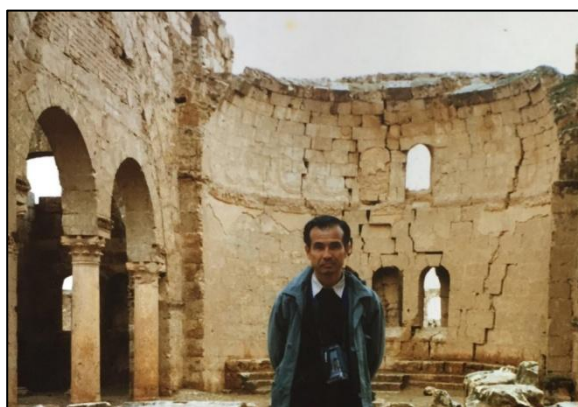


Maaloula

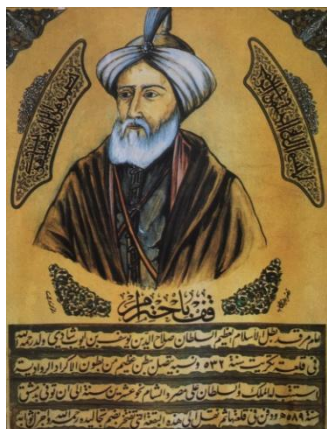
この町では、イエス・キリストの時代の言葉「アラム語」が現在でも話されている。

ウガリッド

ウガリッド (Ugarit) は、ラタキアの北にあった古代都市国家である。国際的な港湾都市であり、西アジアと地中海世界との接点として、文化的・政治的に重要な役割を果たした。紀元前1450年頃から紀元前1200年頃にかけて都市国家としての



全盛期を迎えた。この遺跡から見つかった重要な文化には、独自の表音文字・ウガリット文字と、ユダヤ教の聖書へとつながるカナン神話の原型ともいえるウガリット神話集がある。



(写真)サラディン

クラック・デ・シュバリエ

シリア北西部にある十字軍時代の城塞跡である。クラック・デ・シュバリエとはフランス語で「騎士の城」という意味である。

1142年から1171年まで、聖ヨハネ騎士団の拠点として使用された。(写真)ナンを焼く少女



ウガリット文字は現在のアルファベットの起源となるフェニキア文字に影響を与えたといわれている。

フェニキア文字はその後交易を通じギリシャなどに広がり、ギリシャ人の手でいくつかの文字が母音を表すように変えられ、さらにローマに伝わりラテン文字へと変わっていった。